
たった一言、君に言えない

志茂田のき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった一言、君に言えない

【Nコード】

N67820

【作者名】

志茂田のき

【あらすじ】

祐介がずっと片想いしていた相手は幼なじみの沙汰。

流れで体を繋げてしまっけど、気持ちには伝えられないまま。

そんなとき、二人の共通の友人辰生が何故かよく絡んでくるようになる。沙汰にべったりな辰生にハラハラする祐介は…

君が好きで嬉しいんだ。たとえ君に伝わらなくても（前書き）

見ていたい

傍にいたい

触ってみたい

全部隠して

友達の間まで、満足だと

思っていないとやってられない

君が好きで嬉しいんだ。たとえ君に伝わらなくても

少し動けば素肌が触れ合う距離で向かい合うクラスメイトは吞気に
寢息を立てている。

どうしてこんな展開になったのか、あまり覚えていない。きっと緊張と興奮でとんでもないことを言いだしてしまったのだろうけど、今はそんなことどうだってよかった。

頬に影を落とす長い睫毛。ついさっきまで重なりあっていた白くて華奢で小さな身体。

起こさないように注意を払いつつ、さらりと顔にかかる黒髪を払ってやりながら幸せを噛み締めた。

俺はこいつが大好きなんだ。

紅葉がよく映える晴天の日和なのに、祐介は憂鬱を隠せずため息をついた。

それもこれも自分が悪いのだけど、それは自分でも收拾がつかないくらい大きな過ちだった。

まさか本当にしてくれるなんて思わなかったのだ。軽いノリで話を運んでみたらあまりにあっさりと手に入ってしまった。ずっと欲しくて欲しくて堪らなかったものは、向こうから笑顔で手を広げてきたのだ。

幸せで嬉しくてどうしようもない、はずなのに

肝心なことを言い損なった。タイミングを逃した言葉はでるにでられなくなったものだから、未だ胸に渦巻いたまま以前となんら変わりはしない。

「どうしてこうなるかな…」

自分の不甲斐なさにはいい加減腹が立つ思いで、本日再び何回目かのため息が零れた。

「祐くん、どうしたの？」

パチンと弾けたように意識は現実に戻される。

聞き慣れた声はすぐ真横から聞こえた。近づかれても気付かないくらいに祐介は自分の世界に入り込んでいたのだ。

「沙汰…、なんでもないよ？」

笑ってみせたら、安心したように笑顔を返してくる。沙汰は先日のことなんてなかったかのように今までと変わらず接してくるから、祐介もなんとなくあの日のことを掘り返すことをためらっていた。

沙汰の儂なげな少女めいた容姿と柔かな物腰は祐介だけじゃない、他のクラスメイトさえも引き付けて止まない存在だった。

男子ばかりのこの学校では、沙汰はあまりに危うい。

守ってやりたかった。のに
自分で汚してしまった。

「祐くんやっぱり、今日は変だよ？」

心配そうな表情さえ愛しい。どうにかなくなってしまいそうになる。

自制心がきくうちに、早く

早くこの気持ちを消してしまわないといけない。

せめて友達に戻るように。

あんなことしても困った顔ひとつしない沙汰に、こんなにもやきもきしている自分はさぞ滑稽なのだろうな、と祐介は自嘲気味に笑って沙汰の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「最近憂鬱そうな顔してんな、祐介」

机を囲い昼食を取っている中で、辰生は訝しげに祐介の顔を覗きこんだ。

「え、あ、そうか？」

ぼんやりしていたせいか返事が遅れて狼狽える姿に、ますます辰生は顔をしかめて、うーんと唸る。

「うん、今にも飛び降りそうな感じ」

「え、祐くん死んじゃやだよ」

辰生の言葉に沙汰が慌てて祐介の腕を掴み揺さ振った。苦笑しながらその手をやんわりと押し戻して辰生を睨む。

「んなわけないだろ、なんでもねーっての」

おどけて笑って見せると、やれやれといったふうには辰生は食べ掛けの焼きそばパンにかじりつく。

そのまま沙汰が念を押すのに困ったように応える祐介をチラリと見やって誰も聞こえない小さな声で呟いた。

「…そうゆうこと、ね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6782o/>

たった一言、君に言えない

2010年11月8日18時13分発行